ることもなく消失する。続いて側脈 L2•3 も幾度か L2•3' の分枝を繰返しながら細くなり，遂には二次脈となって中肋から消失する。葉身の上方では，維管束は腹脈 V の消失によって U 字型となる。また L2•3 が消失したので，葉身上部から先端にかけては，側脈 L1 が二次脈 L1' を分枝し，葉の先端部に近づくにつれて，L1 は全て二次脈として葉身へでていく。この結果，葉の先端部では中央脈 M のみが中肋にとどまっている。そしてこれが葉の最先端に至るまで細い二次脈 M' を分枝する。

*Eupomatia* で観察された腹脈は，これまで報告したモクレン科のものと由来が異なることが注目される。*Magnolia virginiana* や *Michelica champaca* における腹脈は，中央脈から分枝した m と，更に中央脈の両隣りに近接する側脈に由来するものであった。しかしながら *Eupomatia laurina* では腹脈は中肋で維管束環をつくる側脈のうち最外縁に位置する L2•3 からの分枝が単に向軸がわへ移行したものである。

これら由来の異なる腹脈における系統学上の意義を解明するためには，更に近縁群の間での比較が必要である。

---

□林　義雄：**京の野菜記**　pp. 174 ナカニシヤ出版，京都 (1975, X 1) ¥980。京都は都として長い歴史を持ちつづけた処であり，多くの伝統を残した処でもある。野菜についても同様であった。それが近来の急激な発展と変貌で消滅しかかっているものが多いのをみて，著者は府の農業指導の傍，産地を廻り古老にたずね文献を漁ってこの書を作られた。適当に図，地図を加え，失われてゆくのを惜しみながら，その発達と変還，移動の具合から民俗にまで及んでいて，その筆跡は中々興味がつきない。すぐき，壬生菜，聖護院かぶのようなよく知られたものから，えびいも，うきなかぶ，郡大根のような絶滅したもの迄扱っている。このように失われて行くものの記録と，保存の対策について考えさせられる本である。　(前川文夫)

□矢野　勇：**野菜の花**　pp. 162, pls. 78, 朝日ソノラマ，東京 (1975, V.)，¥1,500。朝日新聞の家庭欄に連載されたものを中心にして，写真を全図カラーに置きかえたもの，写真と説明が 2 ページ毎に入れかわっている。軽妙な筆致もさることながら，カラー写真がまことによくとれていて，印刷と相俟ってまことに気持よく見られる。その上に，ショウガ，ツリートマトの花など，専門家にもめずらしいし，十種に近いマメ科の花など，蝶形花冠だと簡単に思いがちだが，まことに多種多様でその意外さにおどろく。アポノゲトンの花が食用になって美味だなどもはじめて知った。カットの植物画が存外きいている。野菜は普通には根，茎，葉，及び果実のどれかを食用にするので，存外花はその中間で見落されているから，その盲点をねらったものといえる。一冊を備えて置く必要のある本と思う。　(前川文夫)